

石クリ通信

8月号
夏特別号

ポンコツ車の思い出

院長 石川 悟

その一 初めての運転

運転免許を取得してから初めて、半年ぶりにハンドルを握ったのは、レンタカーの2トントラック。もちろんポンコツではありませんが、免許取り立てでの運転はとも大変でした。信州大学はいわゆる蛸足大学で、学部が松本、長野、上田、伊那に点在しています。所属していたオーケストラの演奏会は通常松本と長野で行われていました。3年生の春の演奏会、長野での演奏が済み、松本での演奏会の当日、長野支部から電話があり、演奏会で使うハーブを載せた車が松本に向かったが、ケースだけ積んで、本体は長野市民会館の楽屋に残っているというのです。車が松本に着いてから引き返しても、リハーサルに間に合わないのです。至急レンタカーで長野に向かつて欲しい、というのです。現在なら携帯電話で簡単に話が通じるところですが・・・

何度もエンストしながら長野に向かい、ほぼ中間点でたまたま長野からの車と出会い、「ケースの中身は空っぽです。」と告げました。相手はそのまま長野に引き返し、こちらも松本にもどりました。

その二 軽自動車

同級生が車を買うので、お前もお金を少し出して、使う権利を買わないかと誘われて、一万円出資しました。十万円の中古車でしたので、10分の1の割合で使っていたことになりました。東京で車を購入し、中央高速を使って二人で松本まで運転しました。スピードは出ないし、運転も慣れていないので、とにかく冷や汗のかき通し。その頃親にばれていたら、えらく怒られたことでしょう。

中古とは言え、最初はそれなりに快調に走って、家庭教師のアルバイトなどに使いましたが、だんだん故障が出て来ました。

まず床に穴が開きました。穴が開くと、道路の面が直接見え、走っている最中に道路が真下に見えても何も役には立ちませんが、貴重な経験でした。困ったのは暖房が効かないこと。それでなくとも松本の冬は寒いのに、すきま風だらけの車中はしっかりと防寒具を着る必要がありました。

次のアクシデントはオーケストラの練習で長野に行った帰り道。天気もいいし、ちよつと寄り道して聖高原を通って帰ろうということになりました。頂上までは問題なく行きましたが、いざ帰ろうとしたら、助手席のドアが閉まらない。厳密に言うとうと、閉まることは閉まるが、留まらないので、自動的にすぐ開いてしまう。その頃はJAFなどというものがあることも知らず、当然加入もしていませんでした。助手席の私が開かないように必死に押さえて、松本まで帰り、修理工場に直行しました。

最も危ない思いをしたのは、一人で松本市内を運転していた時。

信号が変わって走り出そうとアクセルを踏んだとたん、ガシツと音がしたと思ったら、アクセルが戻らない。エンジンはフル回転、すぐクラッチを踏んで、車を端に寄せ、エンジンを切って事なきを得ました。

その三 9ヶ月持たなかった車

バイクの故障で修理工場に行った時、車検が切れるまで9ヶ月しか残っていないが、5千円で車を買わないかと誘われました。1500ccの車ですが、見た目にも悪くないし、1ヶ月の家庭教師代で払える額なので迷わず購入しました。

最初のアクシデントは衝突事故。教養部の駐車場でもバックしようとしたら、新入生とおぼしき学生の自転車と側面に衝突、後部座席のドアが見事に凹みました。どうせ廃車にする車なので、けがないね、オッケーだ、と言うと青ざめていたその学生の顔がパッと明るくなって、いいんですか、どうも！と落着く。

次のエピソード。オーケストラの何かの理由で、東京までどうしても車を出さざるを得ない事態が起きました。先輩が来て、レンタカーの予算がないので、車を貸してくれ、とのこと。タイヤはツルツル、ブレーキをかけると、左にハンドルを取られるから気を付ける、と注意して送り出しました。無事深夜の中央高速を往復して帰って来ましたが、その後輩の弁「ヘッドライトのハイビームが壊れていたの、運転中ずっとレバーを手前に引いていました。」とのこと。この車は手前に強く引くとフラッシュ、ハイビームにするのはレバーを奥に押す方式。チェックしても特に故障ではありませんでした。「ポンコツ車なので、故障しているに違いない。」という先入観があったようです。

その後この車はライトをつけるボタンが引っこ抜けて、昼間しか運転できなくなり、また夏休み前に1週間放置したら、バッテリーが上がってしまった。9ヶ月を待たずに解体業者行きになりました。同級生の車にひっぱってもらって業者まで持って行ったらわざわざ運んでくれたからと、500円で買ってくれました。

今思い出しても冷や汗が流れるようなことばかりです。医学部1学年100人の中で車を持っていたのは、ほんの2-3人の時代でしたが、思い出深い学生生活でした。



大学3年の時に出演した
コカコーラのCM

閲覧注意（とまではいかない）薬剤師 石川 恵

皆様いかがお過ごしでしょうか。実は今号は院長特集だったのですが、「えー？？」一番怪談に適した季節なのに「〜」と無理言って潜り込んだ次第でございます（笑）そんなこんなで、今回は具体的な怪談をいくつかお届けします。

「玉備津の釜」（雨月物語より 一部改変）

その昔、ある好色男、正太郎が良家の娘、磯良（いそら）と結婚した。磯良は夫に献身的に仕えたが、しばらくすると正太郎は磯良を騙して金を持ち出し、遊女と駆け落ちしてしまふ。磯良は夫の浮気を恨み嘆き、食事も喉を通らず、見る間に衰弱していった。一方で正太郎は、遊女の親戚である彦六の家に身を置いていたが、当の遊女が幾日も経たず半狂乱になり急死。悲しみに暮れながらも訝しく思った正太郎が祈禱師に相談すると、「貴方は裏切った妻の怨霊に憑かれています。そして事態は非常に切迫している。このお札をすぐに至る所に貼りその内四十二日間過ごさない。言いつけを破れば貴方の命もない。」と告げられる。言われるがまま正太郎は部屋で過ごすが、夜な夜な磯良が「ここにも貼ってある。ああ、憎らしい！恨めしい！」と部屋の周りを徘徊。その怒りの声は日増しに大きくなり、正太郎は恐ろしさのあまり寝るに寝られぬ夜を過ごす。そしてとうとう四十二日目。憔悴しきつた正太郎は昇る朝日を見て、隣の部屋で眠っている彦六に叫んだ。「起きてくれ！終わっただんだ！」

目を覚ました彦六は、その直後、耳をつんざくような悲鳴で飛び起きる。

「正太郎！？」

返事はない。よく見ると辺りはまだ真つ暗で、半月が煌々と空を照らしている。部屋に行ってみると、開いた戸にはおびただしい血がかり滴り落ちていた。そして軒の端には大量の毛髪。しかしいくら探しても正太郎の屍や骨が見つかることはなかった。

「心霊写真」(YouTube「意味が分かれると怖い話」より)

誕生日に、ホームパーティーを開いた。その時、家の中で皆の写真撮っていたら変なものが出た。背後の押入れから見知らぬ青白い顔の女が顔を出し、こちらを睨みつけている。これやばいねってことで、霊能力者に鑑定を依頼してもらった。

「この写真からは霊気を感じない。心霊写真でも何でも無いよ」

